

門司の盛衰記

田中 辰明

お茶の水女子大学名誉教授

2025年の日本建築学会大会学術講演会は九州大学伊都校舎で開催された。9月12日に発表を終えた筆者は、小学校時代を過ごした門司を訪問した。(写真1)

序章

関門海峡の町 ― 門司の地理と運命

関門海峡。この狭隘な海の裂け目は、古代より本州と九州を結び、分かちもする要衝として人々の営みを規定してきた。わずか700メートルほどの幅を隔てて、本州側の下関と、九州側の門司が対峙する。潮流は早く、かつては幾多の船がこの海峡で難破し、また、海峡を制する者が西日本を制するとまで言われた。関門は単なる地理的障壁ではなく、政治・軍事・経済の要であり続けた。

明治以降、日本が近代国家として海運と貿易に重きを置いたとき、この狭い水道の西端に位置する門司は、自然と港町として脚光を浴びることとなる。石炭、米、麦粉、硫黄など、産業の血液ともいべき物資を送り出す拠点。さらに国際航路の基点として、門司はにわかに日本海運の中核へと躍り出ることになった。以後、港をめぐる繁栄と衰退の軌跡は、そのまま近代日本の変転と重なり合う。

この「門司の盛衰記」を綴るにあたり、歴史的な資料とともに、門司を生きた人々の声を拾い集めたい。なかでも、戦後の混乱期に街を覆った「パンパン」の存在は、社会の矛盾と女性たちの生きざまを鮮烈に刻んでいる。また、作家・林芙美子が門司港で生を受けた事実は、この土地が文学と人間の深い交錯の場であったことを示している。そして最後に、筆者自身が少年時代に門司で過ごした体験を付け加えることで、歴史と個人の記憶とを重ね合わせたいと思う。



写真1 門司駅ホームに降り立った筆者

第一章

門司港の誕生と近代港湾都市への道 (明治期)

門司が本格的に港町として歩み始めたのは、明治21(1888)年のことである。大倉喜八郎が大里地区に日本輸出米商社を設立したのが嚆矢であった。大倉は近代日本を代表する実業家の一人であり、彼が門司に目を付けたのは、九州一円の物資を集積し、海外に輸出するのに最適の地であったからだ。

翌明治22年、門司港は石炭、米、麦、麦粉、硫黄の特別輸出港に指定される。とりわけ筑豊炭田から搬出される石炭は、日本の近代工業化を支える黒い黄金であった。大量の石炭が鉄路を経て門司港に集められ、船腹に積み込まれて世界へと送り出された。その活況は「門司の夜は石炭の匂いに満ちていた」と記憶されるほどである。

明治24(1891)年には門司(港)駅が開業し、九州鉄道本社も門司港に移転する。鉄道と港湾とが結び付いたことで、門司は一躍、流通のハブとしての地位を確立した。同年、大阪商船会社や三井物産が門司に出張所を開設し、翌年には日本郵船も進出する。全国有力商社や船会社が門司に拠点を設け、ここを拠点に国際航路を開い



写真2 旧大阪商船ビル



写真3 旧日本郵船ビル

ていった。

明治26(1893)年には浅野セメントが門司工場を創業する。重工業の集積もまた、門司の性格を規定した。翌27年、日清戦争が勃発すると、門司港には軍器製造所が設けられ、戦時輸送の拠点としての役割を担う。港町門司は、すでに単なる物流の中継地ではなく、軍事・経済の両面で戦略的価値を持つ都市へと成長していた。

明治30年代に入ると、門司の発展はさらに加速する。大阪商船(写真2)や日本郵船(写真3)が支店を開設し、三井物産、鈴木商店といった財閥系企業が拠点を設ける。明治31(1898)年には日本銀行西部支店が門司に置かれ、金融の中核としても機能し始めた。港町が銀行を引き寄せるのは必然であった。莫大な貨物取引を支えるためには、資金の出入りを扱う金融機関が欠かせないからである。

このころ、門司は九州随一の国際都市としての風格を帯び始める。関門連絡船の就航、新聞社の創刊、郵便局や税関の整備など、インフラも整った。欧米風の建築が並び、街には異国の言葉が飛び交った。居留地は存在しなかったが、外国人商人や技師の姿が珍しくなかった。明治末期から九州の鉄道距離は門司を起点として測られた。昭和17年4月に関門トンネルが開通すると、大里駅が門司駅に、門司駅は門司港駅に改称された。

そして明治36(1903)年、後に日本を代表する女流作家の一人となる林芙美子が、ここ門司港で誕生した(放浪記の著者である林芙美子の出生地には下関、鹿児島の説がある)(写真4)。まだ港町の雑踏がそのまま彼女の生を迎える背景であり、貧困と移動を繰り返した少女時代の根に、この土地の風景が深く刻まれていたのである。



写真4 「放浪記」の著者、林芙美子は門司で出生した(ただし、下関、鹿児島で出生の説もある)

第二章

繁栄の港町 ― 大正から昭和初期の門司

1 鉄道と港の一体化

門司の繁栄を決定づけたのは、鉄道と港湾の一体化である。明治34(1901)年、関門連絡船が開設され、下関と門司を結ぶ鉄道連絡が確立すると、東京から九州各地への旅客・貨物輸送はすべて門司を経由するようになった。旅人は門司駅で列車を降り、そのまま港の待合所から関門連絡船に乗り換え、下関駅へ向かうことができた。この鉄道と船のシームレスな接続は日本近代交通の象徴であり、門司はその中心に位置した。筑豊炭田から運び出された石炭が港に集まり、巨大な積出施設から外国船へ積み込まれる光景は、まさに近代日本のエネルギー輸出の象徴であった。岸壁には石炭の山が築かれ、黒い粉塵が風に舞い、港湾労働者の掛け声と蒸気機関車の汽笛が響き合っていた。

2 大陸への玄関口

日清・日露の両戦争を経て満州や朝鮮に日本の勢力圏が拡大すると、門司港は中国大陆と朝鮮半島への玄関口として機能した。釜山や大連への定期航路は活況を呈し、連日、多くの乗客を乗せた汽船が埠頭を離れた。異国へ渡る人びとで待合室は溢れ、洋装や香辛料の匂いが町に漂った。また、横浜や神戸を経て上海・香港へ向かう外国航路の船も、門司で燃料や物資を補給した。石畳をトランク片手に歩く欧米人の姿が町を彩り、門司に国際都市としての華やきを添えた。

3 港の発展と街の変貌

大正3(1914)年、門司駅は木造二階建てのルネサンス様式駅舎に建て替えられた(写真5)。赤煉瓦と白い石材を組み合わせた意匠は、西洋の風格を漂わせ、門司が「国際港」としての顔を誇示する象徴であった。設計はドイツ人建築家ヘルマン・ルムシュツェル(Hermann Rumschöttel, 1874-1918)によるもので、駅舎の広いコンコースには外国航路の乗船客や商人、芸妓、荷役労働者などが雑多に行き交い、港町特有の活気に満ちていた。

その後、大正6(1917)年には日本銀行西部支店が門司支店(写真6)に改称され、名実ともに門司は九州経済の中心地となる。港には石炭積み出し用の巨大なホッパーが林立し、黒煙を吐く船が絶え間なく出入りした。夕暮れには港一帯が煤で霞み、街灯が灯ると、異国情緒に満ちた幻想的な光景が広がった。

4 文化と国際交流の時代

大正11(1922)年12月、世界的物理学者アルベルト・アインシュタインが来日し、門司の三井倶楽部(写真7)に宿泊した。財閥系企業の迎賓館であった同倶楽部は、洋風建築の粋を集めた建物として今も残る(写真8、写真9)。アインシュタイン夫妻はここから港を眺め、汽笛に耳を傾けたと伝えられる。この出来事は、門司が国際的な交流の場であったことを象徴している。

さらに大正13(1924)年には通信省の門司郵便局電話交換所が竣工した(写真10、写真11)。設計は後に東京中央電話局や日本武道館を手がける建築家・山田守で、鉄筋コンクリート造の近代建築が港町に新たな表情を与えた。門司は港湾都市であると同時に、建築文化の先端を示す場所でもあった。



写真5 1914年竣工の門司港駅(重要文化財)



写真6 門司の本町にある「日本銀行門司支店跡」の碑

5 商都としての成熟

港の活況は町並みにも変化をもたらした。駅前には洋風の銀行建築や商館が並び、海運・保険・貿易・倉庫業が軒を連ねた。商人たちの往来が絶えず、門司は九州有数の商都として発展する。料亭や旅館、芝居小屋が林立し、歓楽街も賑わいを見せた。遊郭には異国船員や出稼ぎ労働者が集い、港町の夜を彩った。こうして門司は、単なる交通拠点を超え、人間の喜怒哀楽が交錯する都市へと成熟していった。

6 文化の交錯と林芙美子

この時代の門司には、多様な文化が入り交じっていた。外国の酒や食材、音楽、映画が町を潤し、カフェやビヤホールが社交場となった。地方都市でありながら、門司は東京や大阪に劣らぬ都市文化を体験できる場所であった。作家・林芙美子が幼少期から青春期を過ごしたのもこの時期である。石炭の埃、港の汽笛、異国船員の姿、遊郭の灯り——そうした港町の風景が彼女の感受性を育み、のちの放浪と文学へとつながっていった。



写真7 門司三井倶楽部



写真8 門司三井倶楽部でアインシュタインがし応した寝室



写真9 門司三井倶楽部でアインシュタインが使用した浴室



写真10 旧通信省門司電話交換所

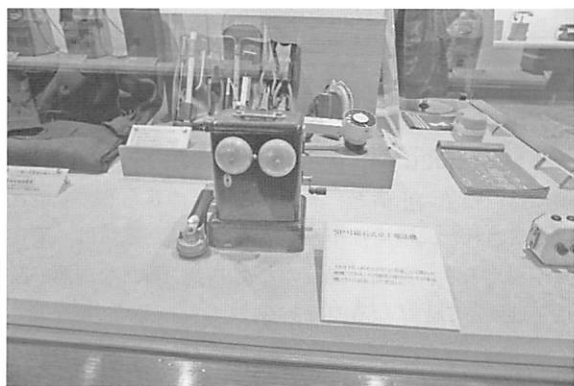


写真11 旧通信省門司電話交換所、現在は NTT 西日本の博物館、電話通信の歴史を学ぶ事が出来る

隆盛を誇った。

しかし、世界恐慌の波はこの繁栄を直撃した。貿易量は減少し、石炭需要も落ち込み、港湾労働者の生活は不安定となる。それでも門司は、大陸航路の要衝としての機能を保ち、国際都市の面影を失うことはなかった。昭和17(1942)年に関門トンネルが開通した。

日本国有鉄道と称していた時代、門司は九州全体の国鉄を統括していた。九州内の鉄道の距離は門司を起点として測られていた。門司港駅には0哩標が残っている(写真12)。門司には旧門司鉄道管理局の建物が残っている。現在ではレトロの街、門司を象徴する建物である(写真13)。

7 昭和初期の繁栄と陰り

昭和2(1927)年には日本郵船門司支店の新社屋が完成し、三井物産や鈴木商店などの大手商社も競うように豪壮なビルを建設した。昭和5(1930)年には門司市役所が竣工し、行政機能も整う。門司は「一港町」を超え、九州の玄関口、あるいは西日本経済の中核の一つとして

8 筆者の記憶

筆者が父親の転勤により門司を初めて訪れたのは戦後間もない1950年のことであった。家族とともに東京から特急で24時間をかけて到着した。当時は蒸気機関車の時代で、門司港のホームに降り立つと顔は煤で真っ黒になっていた。到着後に洗顔した駅の洗面所は、今も当



写真12 門司港駅に残る0哩碑



写真13 旧門司鉄道管理局ビル(俗称門鉄ビル)

時のまま残っている(写真14)。

第三章

戦争の影と焦土の町(昭和戦中期)

昭和10年代に入ると、門司港をめぐる風景は次第に戦争の影に覆われていった。昭和11(1936)年の関門トンネル起工式に象徴されるように、交通・物流の基盤は整備されつつあったが、その背景にはすでに国家総動員体制の準備が進んでいた。昭和16(1941)年12月、太平洋戦争の開戦と同じ年、関門海底鉄道トンネルが完成し、門司と下関を鉄道で直結した。これにより、九州からの石炭や軍需物資は途絶えることなく本州へと送り込まれる体制が整ったのである。

門司港は石炭輸出の拠点であると同時に、軍需輸送の最重要地の一つとなった。港には軍用船がひしめき、兵士たちが乗り込み、南方へと向かっていった。軍需工場では昼夜を分かたぬ稼働が続き、港町の雑踏は次第に軍靴の響きと防空警報のサイレンに掻き消されるようになった。

しかし戦局が悪化すると、門司もまた空襲の標的となる。昭和20(1945)年、アメリカ軍の艦載機が門司を襲った。黒煙が立ち上り、街は炎に包まれた。門司港に並ぶ倉庫や埠頭施設は焼き払われ、住宅も灰燼に帰した。港湾都市として発展してきた街のインフラが、次々と瓦解していったのである。石炭の積み出し施設や三井倶楽部の周辺も爆撃にさらされ、人々は防空壕へ逃げ込むほかなかった。

戦災の記録には、焦土と化した街を呆然と歩く人々の姿が描かれている。焼け跡に立ち尽くす母親と子供、瓦



写真14 往時のまま残る門司港駅の洗面所

礫の中で生活を立て直そうとする労働者。港は再び物資の集積地となるが、それは復興のためではなく、敗戦間際の最後の軍需輸送を担うためであった。

そして昭和20年8月、日本は敗戦を迎える。門司の街には、戦争の爪痕と、失われた人々の暮らしの記憶だけが残された。港湾都市として築き上げた繁栄は一瞬にして消え去り、瓦礫と混乱のただ中で、新たな占領の時代を迎えることになるのである。

第四章

進駐軍とパンパンの時代 — 戦後門司の断面

敗戦から間もなく、昭和20年10月、門司には米軍が進駐した。港町の空気は一変する。制服に身を包んだ進駐軍兵士たちが街を闊歩し、彼らを相手にした商売が次々に生まれた。進駐軍は門司港を拠点に物資を受け入れ、また朝鮮半島やアジア各地へ送り出す基地として利用した。そのため、門司は一種の「前線都市」として、戦

後日本の中でも特異な賑わいを呈したのである。

この時期、街の至るところに姿を見せたのが「パンパン」と呼ばれる女性たちであった。パンパンとは、占領軍の兵士を相手に売春を行った女性の俗称である。敗戦後の混乱と貧困の中で、生活の糧を得るために身を投じざるを得なかった彼女たちは、街の現実そのものを映す存在であった。米兵が拍手を2回打つと女性が寄ってきたので、「パンパン」の名がうまれたという説もあるが真偽は不確かである。

門司港の繁華街には、夜になると米兵とパンパンが連れ立って歩く姿があった。外国の煙草、チョコレート、チューインガム——それらは戦中に飢えを経験した人々にとって、まさに「夢」のような品であった。同級生の姉がパンパンで、米兵からもらったガムを分けてもらったという回想は、この時代を象徴する記憶である。パンパンは単なる「道徳的逸脱」として語られる存在ではなく、戦後社会が抱えた矛盾、すなわち「敗戦国としての屈辱」と「生き延びるための現実」の狭間で生きた女性たちの姿を示していた。

筆者自身、幼少のころ幼稚園で「鬼畜米英」と教わったにもかかわらず、その米兵と日本女性が手を取り合う姿を目にして、大きな戸惑いを覚えた。愛国と敵愾心を叩き込まれた教育と、目の前の現実との落差。その矛盾を飲み込めず、子供心に「いったいこれはどういうことなのだろう」と疑問を抱いた。その体験は、戦後の価値観転換の衝撃を如実に物語る。

進駐軍の存在は街に一時的な繁栄をもたらしたが、それは同時に、米兵に依存した「歪んだ経済」であった。バーやキャバレーが乱立し、街は夜ごとに騒音と酒の匂いに包まれた。その裏では、戦災孤児や生活困窮者が闇市に群がり、光と影が入り混じる都市風景が広がっていたのである。

第五章

林芙美子と門司 — 放浪と文学の原点

門司港で生まれた林芙美子、明治36(1903)年のことである。港町として国際色豊かな門司の街は、彼女の幼少期にとって絶えず変化し、刺激的な環境であった。石炭の黒煙、汽船の汽笛、外国人や地方出身者の雑多な言葉——これらは、彼女の感受性に深く刻まれ、後の作家活動の原点となった。

港町に育った芙美子は、街の喧騒や人間模様を自然に

目にすることができた。港には日々、多くの人々が集まり、去っていく。石炭の積み下ろしや貨物の搬入、出稼ぎ労働者や船員の往来、さらには料亭や旅館での宴会風景——港町の生活は、生々しい人間ドラマの連続であった。これらの体験は、後に芙美子が描く街の息づかいや人間の感情表現の豊かさに直結する。

港町には戦争の痕跡と占領下の新たな秩序が混在し、人々は生き延びるためにさまざまな立場を強いられていた。その複雑で矛盾に満ちた社会は、彼女が後に作品で描く都市と人間のリアルな感情を形成する土台となった。

港町門司は、単に商業や貿易の場であるだけでなく、人々の欲望や悲哀、喜びや不安が交錯する舞台であった。芙美子は幼いころから、こうした街の生きた様子を肌で感じ取っていた。港に立ち込める石炭の匂い、夜の街に漂う異国風の香り、酒場でのやり取り、船に乗る人々の表情——彼女の文学は、これらの経験に裏打ちされている。

さらに、門司の教育環境や方言、人々の生活のリズムも彼女の感受性を育んだ。港町特有の文化と多様な人間関係、そして戦前・戦後を通じて変貌する街の様子は、芙美子が都市の人間模様を描く上で欠かせない素材となった。

第六章

衰退と再生

高度経済成長期に入ると、門司港は次第にその役割を北九州の新しい港湾に譲り渡していった。石炭産業の衰退、国際航路の減少により、かつての賑わいは失われ、町は停滞の時代を迎える。だが、1990年代以降、歴史



写真 15 旧門司税関



写真16 レトロの街門司を象徴する跳ね橋



写真17 門司で行われたバナナのたたき売り

的建築物を保存・活用する「門司港レトロ事業」が進められ、観光地として再生の歩みを始めた。

赤煉瓦の旧門司税関(写真15)、ネオルネサンス様式の旧大阪商船、そしてブルーウィング門司と呼ばれる跳ね橋(写真16)は、近代建築の遺産として観光客を惹きつけている。港町の風景は新たな装いを得て、往時の繁栄を伝える文化資産となった。

第七章

盛衰の記憶

門司の歴史を振り返るとき、その盛衰は単なる経済的変動に留まらず、人々の生活や感情に深く刻まれていることがわかる。繁栄の時代には異国の文化が流れ込み、戦争の時代には破壊と喪失が町を覆い、戦後の混乱期にはパンパンの存在が生の極限を示した。そして林芙美子の文学により、門司の記憶は普遍的な人間の物語へと昇華された。

門司を歩くと、港の風や石畳の路地が、かつての賑わいと哀しみを静かに語りかけてくる。盛衰の痕跡は消え去ることなく、むしろ町の奥深い魅力として息づいている。

台湾で採れたバナナは船で一旦門司に陸揚げされた。そして再び大阪や東京に運ばれた。しかし積み下ろし地の門司で既に熟成してしまったバナナは門司でたたき売りされた。そのような碑も門司に残っていてレトロの町門司の象徴となっている(写真17)。

門司における筆者の経験

筆者は昭和25(1950)年から2年ほど、父の東京からの転勤に伴い門司に住んだ。当時は特急列車で東京から門司まで丁度24時間かかった。テレビもなく、方言もきつく、文化的には東京とは隔絶された感覚があったが、港町の活気と人々の親しみやすさが、暮らしを支えていた。

朝鮮戦争が勃発すると、多くの物資と米兵が門司港から半島に送られた。街には戦後復興の最前線としての活気が溢れていたが、同時にパンパンの存在や戦災孤児の姿も街角で目にした。前述の通り、幼稚園で「鬼畜米英」と習った筆者にとって、米兵と日本女性の関わりは、子供心に強い違和感と戸惑いを残した。

門司での生活では、級友やその家族との日常が大きな支えとなった。先にも触れたが、クラスメートの姉がパンパンで、米兵からもらったチューイングガムのお裾分けをもらった記憶もある。港町の光と影、豊かさと貧困が混在する風景は、筆者の心に深く刻まれた。

父親が任務を終え、門司を離れる際、クラス全員が駅まで見送りに来てくれ、門司港駅の駅員も改札を開けてホームまで誘導してくれた。手を振る仲間たちの姿は、港町の温かさと絆を象徴する光景であった。多くの級友は大学進学後、関西や他都市へ進み、門司には戻らなかった。しかし一部の友人は、門司に残り家業を継ぐなどして、街の歴史を今に伝えている。しかしながら彼らも既に鬼籍に入っており、今回の門司訪問では旧友の誰にも会う事は出来なかった。

〈参考文献〉

堀雅昭 門司の近代 弦書房 2017年
写真で見る日本、小学生朝日新聞編 1952年